

平成30年第3回島田市総合教育会議議事録

日 時	平成31年2月4日(月)午後1時34分～午後3時04分
会 場	島田市役所 第3委員会室
出席者	染谷絹代市長、濱田和彦教育長、牧野高彦委員、秋田美八子委員、原喜恵子委員、磯貝隆啓委員
欠席者	
傍聴人	
説明のための出席者	畑教育部長、平松教育総務課長、南條社会教育課長、駒形戦略推進課長、増田学校教育課指導主事
会期及び会議時間	平成31年2月4日(月)午後1時34分～午後3時04分
議事	(1) 第2次島田市生涯学習推進大綱について (2) 島田市の特別支援教育の現状と課題について
染谷市長	<p>開 会 午後1時34分</p> <p>ただいまから第3回総合教育会議を開会いたします。開会に当たりまして、一言ご挨拶をさせていただきたいと思っております。</p> <p>まずは、本日大変お忙しい中、皆様にはご出席を賜りましてありがとうございます。このごろのニュースを見ておりますと、千葉県野田市の小学校4年生の女の子、栗原心愛ちゃんの虐待の痛ましい事件、昨日は文科省から行政指導が入ったということですが、まさに教育委員会は今、アンケートの子供の心の叫びをどうしてお父さんに渡してしまったんだということも併せて、非常に皆様からご批判をいただいているところでございます。私どもも、もう一度自分たちの組織体制、それから日々の活動の中で見逃していることがないか、改めて自らを問い直すことが必要ではないか、と私は思っております。</p> <p>また、社会教育施設ではございませんけれども、島田市には駿遠学園という施設がありまして、虐待を受けた障害のある児童の一時保護等もしております。機会がありましたらぜひまたご視察をいただければありがたいと思っております。</p> <p>では、新しい年を迎えて、決意も新たに市政に取り組んでまいりたいと思っておりますので、皆様よろしくお願いをいたします。</p> <p>平成の時代もあとわずかとなりました。「平成最後の」という言葉が昨年末ごろからよく耳にするようになった気がいたします。この総合教育会議も「平成最後の」となるのでしょうか。</p> <p>さて、平成時代の30年間を振り返ったとき、皆様はどのようなことが印象深く残っているのでしょうか。まずは、阪神・淡路大震災、新潟中越沖地震、東日本大震災、熊本地震などのほか、記憶に新しいとこ</p>

ろでは、広島の水害被害や昨年の猛暑など大きな自然災害が思い返されます。私たちが住んでいるこの静岡県も、いつ地震が起きてもおかしくないと、昭和の時代から言われておりました、備えを十分にしていかなければと改めて感じているところです。

ところで、この30年で大幅に進歩したものといえれば何を思われるでしょうか。やはり、情報技術の発展が平成の時代に入って飛躍的に伸びたことだと思います。社会のIT化が進んで、30年前には考えられなかったことがたくさん行われるようになりました。

一方で、変わらないものは何があるのでしょうか。いろいろなことが思い浮かぶと思いますが、教育の点から1つ挙げるとすれば、残念な話ではありますが、いじめの問題は昔と変わらず存在しておりました、非常に悩ましい問題であります。他県では残念な事件が報道されておりますが、島田市では深刻な問題は報告されておられません。子供一人一人の様子に目を配ってくれる現場の先生方の努力のたまものと感謝しております。教育大綱にも掲げる豊かな心を育むことが、いじめをなくす一番の近道であると信じておりますので、引き続き市と教育委員会が連携して、子供たちが安全・安心に勉強に打ち込める環境の整備を進めていきますので、皆様のお力添えをよろしくお願いをいたします。

ここで、濱田教育長からご挨拶をいただきたいと思っております。

きょうは、総合教育会議に参加していただきましてありがとうございます。大変大勢の傍聴の皆さんにもおいでいただいたことを感謝申し上げます。

今、市長からも安心・安全なというお話がありましたが、私も教育長就任時に言わせていただいたことは、信頼される教育ということが一番言わせていただきました。その第一番目が安全・安心な学校、または安心・安全な教育ということでした。そういう点から、防災やいじめや不登校についての教育的な配慮には力を入れさせていただきました。一定の成果はあったとは思っていますが、これからもそこには配慮をしていかなければならないと思っています。

きょうの議題でもあります生涯学習それから特別支援のことにつきまして、弱い立場の子供たちへの配慮ということにつながってくるものがあるのではないかなと思っています。生涯学習大綱につきましては、新しく作成されてきましたが、ライフステージと社会的な広がりという部分にきちとした縦軸、横軸の視点で大綱が作られている点は大変ありがたいと思っています。

それから、特別支援教育の理解については、徐々に進んできていると思っています。昨年、初倉小学校の藤村校長先生が地域の皆様方に発達障害についての講演をしてくださいました。地域の年配の方から、こういうことをもっと早く知りたかった、知っていれば自分の孫への関

染谷市長

わりも違っていたではないかというようにお話を聞きました。理解は進んでいくも、まだまだこの理解の広がりという部分については、課題があると思っています。今回の総合教育会議で特別支援をみんなで話し合っていくことによって、少しでも理解が広がる、情報の共有ができたらいいなと思っています。

それでは、きょうの話し合いのほう、よろしく願いいたします。
ありがとうございました。

染谷市長

[議 事]

それでは、次第に入り、議事を進めていきたいと思えます。

まず、島田市生涯学習推進大綱についてであります。

今回策定する第2次島田市生涯学習推進大綱について、平成28年度の第4回の教育総合会議において協議を行いまして、メインスローガンを「わたくしたちが自分らしく学び続けられるまち」としまして、サブスローガンを、学びでこころ豊かな私になります。みんなの学びで心をつなげます。こころのつながりで学びを活かし豊かなまちをつくります。この3つとすること、及びライフステージにおける学びのあり方と個人から地域へと続く学びの広がりを主軸に策定していくこととしたところです。

その後、策定作業を進め、このたび案が完成をいたしましたので、その概要を事務局から説明してもらおうとともに、今後の生涯学習活動の推進についてご意見をいただきたいと思えます。

それでは、事務局から説明をお願いします。

南條社会教育課長

それでは、説明に使う資料をご確認ください。

タイトルに、わたしたちが自分らしく学び続けられるまちづくりプランと題しました最終案の絵の描いた冊子。それともう一つ、別冊で生涯学習を推進させる164の事業と題しました資料、この2つを使います。

早速で申しわけありませんが、この別冊の164の事業で一部誤植がありますので、先に訂正をお願いいたします。

1ページ、1ページで作られた委員さんのものについては、2ページ目になります。その他の皆さんにはツーインワンで印刷されますので下の段になりますが、一番下のところ、掲載事業が平成31年と書いてあるところ、30年の誤植でございます。大変申しわけございません。掲載事業は30年11月に調査したものでございます。表紙の裏側、あるいはツーインワンは1枚目の一番下のところ。

よろしいでしょうか。

〔「はい」と言う者あり〕

それでは、大綱の最終案のご説明を申し上げます。

ページ行ったり来たりで大変で恐縮でございますけれども、よろし

くお願いいたします。

まず、大綱案の7ページをご覧ください。

現在の大綱は、審議委員30人を中心に2年間の協議を経て、平成20年4月に策定をいたしました。当初の想定期間10年を経たことから、全面的に今回改訂しようとするものです。

今回、第2次大綱の策定に当たりましては、市長からもご説明いただきましたとおり、推進委員の皆様から現在の大綱は市民の生涯学習のあらゆる場面を網羅的に捉えたすきのないものになっているものの、推進体制が行政中心になっているという意見がたくさんございました。

そこで、島田市の生涯学習理念である、市民一人ひとりの主体的な学びにつなげるという目的から、人生の節目、ライフステージごとに学びによって乗り越えるべき目標を設定し、それに学びがどう生かされているか、生かしていくことができるかというものを設定して、生涯学習に主体的に取り込むべくための道しるべのような存在にしたいと考えました。

9ページをご覧ください。

こうしたことを受けまして、今、これも市長からご紹介ありましたとおり、基本理念を「わたくしたちが自分らしく学び続けられるまち」といたしました。

さらに、一人一人の成長の時間軸に、個人の学びが仲間、それからさらに地域と広がっていく、そして豊かな町になり、さらにそれが還元されて個人も豊かになるという発想から、空間的な軸も重なることで、表すこととしました。

表紙をご覧ください。

そうしたことから、このプランの愛称を、わたくしたちが自分らしく学び続けられるまちづくりプランといたしました。

恐縮です、もう一度9ページをご覧ください。

こうした理念を表すために、これも市長からご紹介いただきました3つのスローガン、いわば目指す姿というものを挙げました。1つ目に、学びでこころ豊かな私になります。2つ目に、みんなの学びでこころをつなげます。3つ目に、こころのつながりで学びを活かし豊かなまちをつくります。そうしたものを挙げてみました。

これらの理念は、先ほどもありましたとおり、先の総合教育会議で了承されまして、以来11名の市民委員を中心に高校生、大学生、あるいは多くの市民の皆様と共に、具体的なライフステージのレンジやそれを推進するための事業のひもづけなどの作業を行いました。

38ページをご覧ください。

これまでの経緯でございますけれども、ご覧いただきましたとおり、協議会を26回、市民を交えたワークショップやオープンセミナーを4

回、延べで133人の市民の委員の皆様と多様な視点で検討を重ねてまいりました。

それでは、本題に入ります。

13ページ、14ページをご覧ください。

ご覧いただいたのが、そこで創設されたしまだ型人生区分でございます。ふじのくに人生区分などを参考に、島田市独自の区分を創設いたしました。一般に人生区分とは、乳幼児期、少年期、青年期、壮年期、老齢期の5つに分かれておりますが、人生100年時代、成人してから年齢が、期間が長くなっていることから、特に壮年期、高齢期を細分化することで、課題や目標の検討をしやすくいたしました。

次の、15ページから19ページにかけてご覧ください。

横軸がこの人生区分でございます。縦軸が個人、仲間、地域へと広がる空間的な広がり置いております。こうした表、いわゆるマトリックスを設定しまして、それぞれが交差する升の中に、課題や目標を例示して自分自身の課題や目標を考える道しるべになるのではないかと考えました。

20ページをご覧ください。

この図は縦軸に学びによる人の成長、横軸に個人から地域の学びの広がりを表してございまして、これに学校教育や家庭教育などのそれぞれの学びの活動や学びの場を落とし込んだ学びの体系です。これによって、それぞれの活動や場がどこに位置しているかを表しまして、この立ち位置に沿った活動ができるのではないかと提示をしております。

最後に、具体的な推進についてです。先ほどご覧いただきました別冊、生涯学習を推進させる164の事業をご覧ください。

これは各課に対して、平成30年11月現在で生涯学習の推進に資する事業の調査を行いまして提出されました。集まったのは164の事業でございます。

それぞれを本編の中でステージごとに整理して掲載しました。この表の中にも、個人あるいは仲間、それから地域全体という場面でどういうふうに事業が生かせるかを定義しました。これで個にとっては、その事業がそれぞれどこで役に立つのかが分かりやすくなるのではないかと、というガイドブックというふうに活用いただければと思います。

以上、全体像のご説明をいたしました。

なお、この最終案は社会教育委員の会議、教育委員会定例会にてご意見を承った上で、昨年12月から本年1月にかけてパブリックコメントを実施しました。パブリックコメントについては、特にご意見はございませんでした。ご審議のほどよろしくお願ひしたいと思います。

ありがとうございました。

染谷市長

牧野委員

ただいま、新しい生涯学習推進大綱の説明がありましたが、皆様からご意見等いただきたいと思います。

今回の大綱の特徴として、ライフステージを区分し、それぞれの区分に合わせた目標を設定しています。こうした点を踏まえまして、この大綱をもとに、今後の島田市の生涯学習の推進に期待することについてお話をいただければと思います。

いかがでしょうか。どうですか。

10年前の生涯学習の目的といいますか活動という内容をもう一度見直してみました。いつも新しい知識や技術の習得に迫られているのは10年前も今も一緒です。いろいろ生活が楽になって、時間に余裕ができたのも、今もそんなに変わりはありません。ただ、学習の成果が評価されているかを見ますと、10年前の項目から見ますと十分できていないなという気がいたします。

今回の生涯学習推進大綱のタイトルが僕は気に入りました。学習の成果をまちづくりに生かそうということを全面に押し出しているの、自分が勉強したことは生かされるんだなということ、このタイトルに書いている、とまず思いました。

それから、次にライフステージの件ですけれども、これは非常に分かりやすく、最初は60歳になったら、いや、60歳からが青春だと思ったりする方もいるし、そのために今まで働いてきて、退職してからが人生だという方もあると思うのですね。ですから、最初にこれを見たときは、年代を区分して押しつけがましいなと最初は思いました。ですが、こういうタイトル、まちづくりプランと言っていると、生涯学習という漢字が4文字よりも、他人事でない、とつきやすいという気が非常にしました。

私は最近孫娘ができて写真をちょっと気にしていて、おおりのホールで写真展がありました。どんな写真があるかと思って見たのですけれども、皆さんは僕よりも歳上の人ばかりですけれども、簡単に撮れるというお話をいただいて、それでカメラを1つ買いました。これから勉強するのですけれども、そういったとつきやすさが、この人生区分を参考に気づくなという、そういう人生の気づきのガイドになっているな、とても分かりやすいと思いました。

それから最後に、まちづくりプランということですので、勉強した成果を、あの人はこれをやっているけれども大したことないよねという考え方ではなくて、逆に、こんなこともあの人ではきるんだねというような、より背中をみんなで押していけるような雰囲気を作り出していただく、この大綱が生きてくると感じました。

染谷市長

牧野委員、ありがとうございます。

私も、この10年間の違いの一つに、市内のいろいろな自治会で公民館等を使って、地域の文化展、地域の生涯学習の発表の場というのを

磯貝委員

結構やっぴらっしゃるんですね。そうすると、ご近所のおじいちゃん、おばあちゃんがこんなことができるんだ、こんなすばらしいコレクション持っているんだって、作品とそれを作った方たちの顔が結びつくものだから、おおりに見る作品展よりよほど感動があるんですね。そういう取り組みが市内のあちこちでできるようになっているというのは、この10年間の変化として大きな成果の一つではないかなと思っています。

ほかにはいかがでしょうか。

これを一番最初に案でいただいたときに、まず私の身に置いて考えました。本当に自分の年代ではどうすればいいのかなということをおぼろげに見てしまいました。私、地域活動ということに正直言って手抜きしているものですから、やはり地域でいろいろな役をやって、そして実際に震災のときは、隣近所が助けになるということが実際にあるわけで、そういった点でも、一つ私の足りないところがまた見つかったなという気がいたしました。

青壮期とそれから黄金期が、新しくしまだ人生区分の中でつけ加えられたということですが、本当にいい言葉だなと思いました。

特に男性、これは私の経験でもあるのですが、私民間のサラリーマンだったのですけれども、50を過ぎるとだんだん課長とか部長とかと出世していき、ある時点で誰もが執行役員になれないし、社長にもなれないから、諦めざるを得ないときがあるわけです。それは頭では分かっているのですが、なかなか心が納得しないという点が私もありました。

そういう点、やはりここに書いてあるように、仕事以外の時間を見つめ直す、それから会社以外の人とのつながりを深めて、新しくやりたいことを見つけなさいという、これがあるものですから、当時の私にこれがあつたら大分救われたのではないかなと思っています、本当にいいものができたなと思います。

それからもう一つ、実は亡くなった父親と母親が、駅前の楽習センターにずっと通っておりまして、2人で仲よく100円バスに乗って向谷から駅前まで行くのを何回も見ていました。当時私は東京にいて、たまにこちらへ帰ってくると2人で出かけている、それはたしか体操教室とかヨガだとかリズムミックに行つて、本当に楽しく2人も過ごさせていただいて、本当にこちらの企画の方々に感謝しています。皆さんから高齢になつても磯貝さんみたいな体操をしたいと言われることが私の本当にうれしい気持ちの張り合いになるのよということをおふくろは盛んに言っていました。本当にいい企画を立ててもらつてありがたかつたと思っています。

牧野さんも少しおっしゃつたんですけれども、個人の人生観みたいなものに、行政が入り込むということについては抵抗のある人もいる

染谷市長
原委員

かも分かりませんが、これは道しるべとして持っておくとすごくいいものだなと、私の実感として感じました。

それから、長くなって申しわけないのですけれども、この164の事業ってすごくいっぱいあって、特に幼稚園から小学校に向かうところが社会教育課の方でずっとフォローされています。これは例えばほかでもあるのですけれども、子育て応援課だとか、保育支援課の方々のコラボも大分やられているようですけれども、もっと頻度を厚くしたり、それから問題は中身だと思うのですよね。要するに、市民の人たちから支持されなければしょうがないわけで、そういう点を今後とも厚くしていただければありがたいと感じました。

ありがとうございます。

ここにある人生区分を見せていただいて、本当に縦横軸ですごく整理してくださってあるなということが一番強く感じました。やはり自分の年齢に合わせて自分はどうなんだろうというところを一番最初に見ますし、それから自分の息子や娘の年代だったら何を求められているんだろうというところ、それから私は孫と関わる時間が多いものですから、孫育てをしている中でどういうことを考えながらどういう姿を求めながら育てていったらいいんだろうというような、一つの指針になるような言葉があふれていますので、大変分かりやすくいい目標を出してくださっていると思いました。

それから、こちらにある164の事業ですけれども、本当にたくさんの事業を島田市として設定してくださっている。そして、それを分かりやすいように出してくださっている。大変よく整理されていて、分かりやすく集約されていると思いました。

どちらにつきましても、多くの方がこの内容を知ることがやはりこれから必要になるのではないかなと思います。いい冊子ができて役所にとどめておいたり、限られたところに置いておくだけでは、多くの市民の方に共感してもらえないと思いますので、ぜひこれらの中身がより多くの方に知ることとなるような働きかけ等をお願いできたらと思いました。生涯学習というと、どうしても何かを学ぶということ、具体的なものを具体的な成果として学んでいくというふうに考えがちだと思うのですけれども、私はそうでなくて心のありようが変わることなのではないかなと思いました。それは、実は私事ですが、きのう地区の山の神様を祭る行事が年1回ありまして、回り番で皆さんが当番でやっていくのですけれども、昔は山を持っていた方たちを中心になってやられて、今はそういう方がいらっしゃらなくなって、それを地域で代替してやるようになったのですが、正直のところ今まで参加したことがありませんでしたし、どういうことかよく分からなかったもので、何で私たちが当番をやらなければいけないと実際に思いました。

しかし、それをやらせていただいて、神主さんの祝詞の中にも、山を愛でる人、それから自然の木々を愛し、それから川、海が美しくなっていく基本が山であると、そういうものをみんなで守っていかなければならないという祝詞の言葉がありまして、あ、そうか、私たちも無関係ではないんだとそこで教えられたわけですけども、その行事をやる中で何にも知らなかった人たちが、地区の代表ということで知り合いになり、そして一つの行事をやり終え、そして今まで知らなかった値打ちを知り、私も今後は生き方を変えていかなければならないんだというのを、その機会に学ぶことができました。一つの人との関わりが広がったり、一つの値打ちが分かったということも大きな生涯学習の一つになるのではないかなと思いました。そして、ここの区分を見てみると、やはり地域での立場を考えていかなければならないという言葉がありまして、今まで自分のことばかりやっていたものですから、年齢的にこういうものが求められているんだというのを再確認した次第です。

染谷市長

ありがとうございました。

生涯学習とは心のありようが変わること。素晴らしい言葉だなと思いました。

秋田委員

この生涯学習を推進させる164の事業を見せていただいて、本当に島田市内たくさんの方の事業を展開されているなど、本当に感心をしました。ありがたいことだと思います。私自身も楽習センターなどで講座を持たせていただくことがあるのですけれども、そうすると割と年齢層の高い方の参加が多くて、若い方はなかなか難しいのかなと思っていたんですけども、よくよく話を聞いていくと、パートで仕事をしながらローズアリーナのスタジオパス、毎週決まったものは難しいけれども、自分の都合のつくときには行きたいのでスタジオパスで行っていますという方がいたり、単発の講座だったら行けるので、ちょっと気をつけて情報を得るようにしていますという方がいらっしゃいました。なので、参加しやすい形というのも、また一つ考えていくと、ますます市民の皆さんには参加していただけるようになるのかなと思いました。

先日楽習センターで、お母さんたちを対象にした入園入学グッズ作りを託児つきでやらせていただきました。参加人数はそれほど多くなかったのですけれども、ミシンの使い方が分からないお母さんたちが、でも子供のために入園グッズは自分で作ってあげたい、という思いで本当に一生懸命2日間かけて、入園のバッグとか給食袋を作りました。そういうものはなかなか託児がないとできないものではあるので、やってみたいというところを応援できるような講座がこれからもやっていけるといいなと思いますし、それが一つのきっかけになって、いろんな講座に出てみようとか、これをやってみよう、あれをやってみよ

染谷市長

うというお母さんたちのやる気だったりとか、あとふだんはご飯を作ってもなくなっていくってしまうものなので、そういう中で何か自分がこれをやったというものが残るとというのは、本当にお母さんたちの自己肯定感とか心の安定につながる部分でもあると思うので、いろいろな形で若い方が参加しやすい講座の形ができていくといいなと思います。

ありがとうございました。

皆様それぞれにご意見をいただきました。

今4人の方のご意見を聞いてさらにこのようなことを思いましたというような、さらなるご意見があればお聞かせをください。ほかの方々のご意見伺っていかがでしょうか。

濱田教育長

教育長はほかに何かお感じになりましたか。

私、今お話を聞いていて、やはり一番いいなというか大事にしたいと思った話は、原さんの山の神の話だと思っています。なかなか学校教育でできないことを地域でやっている、そして山の価値を知らない人たちにも伝えるという、さまざまなすばらしさのある行事だと思っています。こういうような行事が地域で、またはあちこちで行われていると、子供たちの体験の場でもありますし、その体験した子供たちが大人になり、または高齢期を迎えたときに、そういうようなものを担っていく立場になるのではないかなと思うものですから、地域で今言ったような行事というのは、まさに生涯学習の大切にしていかなければならないところだと思います。中でも、価値を伝えるということもそうですし、それから人と人とのつながりという部分。これがとても価値あることではないかなと思いました。個人ではなくて、個人から集団、それから集団から町へという、そういう流れの中を考えたときに、人と人とのつながりがいかにできているか、またはネットワークができているかということが大事だと思います。そういうところができていけば、学校のあり方検討会の中で、私がすごく心に残っているフレーズとして、地域をつくる子供を育成という言葉があるのですね。地域に貢献するのではなくて地域をつくる。将来的に子供たちが地域づくりということが書かれているわけです。そういう意味でも小さいころから、または各年代において地域と結びつく、または地域のネットワークの中に入る、人と人の結びつきができているということが、その人の人生を豊かにするという意味でも、またはまちづくりのためにも、生涯学習のためにも大事ではないかなと思いました。人と人の縁ということ、そこは本当に大事にしていくことが島田市の生涯学習では大切ではないかなと思いました。

染谷市長

ありがとうございました。

それでは、皆様からご意見もいただき、この策定案のとおり進めていったほうがいいというふうに応援をいただいたと思っておりますの

増田学校教育課指導主事

で、この案に基づいて生涯学習を推進していくということによろしく
ございましょうか。

〔「はい」と言う者あり〕

ありがとうございます。

では、そのようにさせていただきます。

きょうは、テーマを2つ設けておりますので、では次のテーマに移
らせていただきます。

島田市の特別支援教育についてでございます。

事務局から説明がありますので、お願いをいたします。

昨年度の総合教育会議では、島田市の特別支援教育における課題に
ついてお話をさせていただきました。今回は、その課題に向け改善努
力したことによる成果と新たな課題、その解決に向けての提案をお話
しさせていただきたいと思えます。

まずは、今年度の取り組みの成果と、その理由についてです。

島田市の特別支援学級と在籍者数が増加しています。平成30年度は
金谷小に自閉情緒学級、六合小に肢体不自由学級が再設されました。
島田第一小学校の知的学級は入級希望児童が増えたため1クラスが増
設され、昨年度計3クラス増えました。

続けて、来年度の学級数です。

平成31年度はさらに4クラス増える予定です。六合中の自閉情緒学
級が再設、その他知的学級もさらに増えて3クラス増える予定です。
ですので、2年間で新たに特別支援学級が7クラス増えたということ
になります。

支援学級の在籍者数にも目を向けてみます。グラフをご覧ください。
平成28年度から31年度までの特別支援学級在籍者数の推移になり
ます。青い線が小学校になります。小学校の在籍者数が大きく伸びて
いることが分かると思えます。平成28年には57名のお子さんが在籍し
ていましたが、来年度は88名のお子さんが在籍することになります。
4年間で1.5倍に増えている計算になります。この傾向は決して島田市
だけではありません。今ご覧いただいているものは、静岡県における
特別支援学級在籍者数の推移です。平成21年から平成30年の10年間で
小学校、中学校ともに2倍になっていることがお分かりになるかと思
います。ご存じのとおり全体的な児童・生徒数は減っているにも関わ
らず、特別支援学級の在籍者数が増えているのが全国的な傾向とも
言えます。

次に、島田の就学支援委員会の審議数の変化についてです。

特別支援学級や通級指導教室等の特別な支援を受けるためには、島
田市就学支援委員会において適切であるという判断が出されなくては
なりません。そういうような特別な支援を希望する保護者の同意や希
望をもとに審議をされます。ご覧いただいているものは24年から30年

の推移です。審議合計数が平成24年には183人だったものが、今年度平成30年には248人にまで増えています。

内訳を見てみます。増加傾向が顕著なのは、就学前の年長さん、つまり園児さんであったり、小学生であったりします。年長さんについては平成24年には20名支援を行いました、今年度は53名。小学生においては96名だったものが133名と増えています。このことは、島田市において早期における就学支援が進んできたという成果の一つだと考えております。

特別支援教室の理解も進んでまいりました。島田市には発達に課題を抱える児童・生徒に対して、支援・指導を行っている特別支援教育室たんぼぽというものが教育センターにあります。主に、自閉症スペクトラム、ADHD、LDと発達に課題を抱えているお子さんがここで支援を受けています。ご覧いただいているグラフは、たんぼぽに通級している児童・生徒の推移になります。平成25年には8名でしたが、平成30年には44名となりました。今、来年度の希望をとっているところですが、来年度さらにご希望されている方が20名いらっしゃいます。支援を受けることのよさということが皆さんにご理解いただけていると思います。

これは年度末に行った特別支援教育室たんぼぽに通っている保護者の声になります。ご覧いただいて分かるように、たんぼぽに来てお子さんを課題が解決されてきたというような声が大変寄せられています。

こちらは子供たちです。子供たちなので細かくは表現できないのですが、気持ちは伝わってきます。心のもやもやがなくなった、自分の心が広がった、自分が今まで苦しかったことが解決されている様子が分かります。

評価は数値にも表れています。

これは年度末に行うアンケートの結果ですが、たんぼぽ教室はいかがでしたかという問いに対して、5点満点で保護者が4.9、児童が4.1と高い評価をいただいています。困り感を持つ児童・生徒、保護者のニーズに応える場となっていることが分かります。

以上述べましたように、島田市では早期からの就学支援が少しずつではありますが、確実に進んできました。また、特別支援学級や通級指導教室への理解が広がっており、適切な支援を受けることが子供たちの笑顔や健全な成長にプラスであるということが広く理解されてきたと感じています。

このような成果が出た要因について考えてみました。

1つ目には、やはり島田市の人の力だと考えております。昨年度より学校教育課や子育て応援課に専門の嘱託員を配置していただきました。経験豊かで専門知識を持つ方がいらっしゃることで、より適切な

支援を行うこともできました。また、学校教育課だけではなく、ほかの課の連携も非常に進みました。臨床発達心理士さん、園長先生、保育士さん、またはそれぞれの課の担当の方と、よりよい連携を持って進んでこれたことが大きな理由だと思っています。情熱を持った皆さんと同じビジョンを持って、よりよい連携を築けたことが、この成果に結びついたと思っています。

2つ目には、保護者に寄り添うことを大事にした就学支援です。今年度ですけれども、1人のお子さんに対して少なくとも3回以上の面談を行ってきました。多い方では10回以上面談を行いました。思い悩む保護者の皆さんに必要な情報を必要なときに提供できるように努力をしてきました。

3つ目には、園との連携です。島田市には公立の園は2園あります。公立、民間に関わらず、どの園の皆様も非常に熱い思いを持って保育・幼児教育に取り組んでいらっしゃいます。島田市の就学支援にも大きな力を貸していただきました。そのような中、園の先生が特別支援学級や通級指導教室の説明会に子供たちのためにたくさん参加をしていただきました。去年とことしでこの参加人数を比べてみましたが、このことも、やはり就学支援を積極的に勧めてくださるのは園の先生なので、大きな理由の一つではないかと思います。また、今年度より保育支援課さんがやっています園長会に学校教育課が参加させていただいて、そこで就学支援等についてのご理解やご協力をお願いしたというのも理由の一つかと思います。

成果がたくさん出た一年ですが、教育現場で新たな課題も今起こっておりますので、少しお話をさせてください。

1つは、発達障害に伴う不登校の増加です。今ご覧いただいているのは教育センターに寄せられた相談内容です。多岐いろいろあります。全部で478件、昨年度はありました。

その内訳を見てみたいと思います。

いじめについては2件、非行については7件です。相談件数が少ないからといって、そうした問題はないというわけでは決してありませんが、しかし、保護者や本人が困って相談する件数としてはここでは多くないことがわかります。

では、何が多いか。一番多かったのは不登校です。183件でした。ほかには発達障害82件、対人関係44件です。27年度からの増加率を見てみたいと思います。不登校は平成27年に比べて68件も増えています。発達障害は53件、対人関係は15件増えております。

少し古いデータになりますが、通常の学級で発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童・生徒に関する調査は6.5%、これは小・中学校の平均です。島田市でも同様な調査を行っていますが、これよりもはるかに高い数値が今現在出ているところです。通常学級

にも発達障害で悩んでいるお子さんたちが今いらっしゃいます。

また、次のようなデータもあります。

児童精神科医における外来患者の50%が発達障害、小児科の外来患者の不登校相談件数において、原因が発達障害であったとされる割合は40%とあります。発達障害のお子さんは年々増え続けておりますが、それに伴い不登校も増えているといった、そうした関連性が確実であると考えています。

なぜ発達障害を持つお子さんは不登校になりやすいか。その主な理由をここに書き出してあります。自閉症スペクトラムのお子さんです。感覚過敏であったり、ご本人のこだわりが強いために、教室のルールに合わせるのが難しい等の理由が考えられます。ADHDのお子さんについては、多動や衝動的な行動から注意や叱責をされることが多くなり、自己肯定感が下がってしまう等の理由が考えられます。学習障害LDのお子さんについては、やればできるのにやらないと見られたり、みんなと同じような努力をしているのに学習内容が定着しない等の原因が考えられます。いずれにおいても、苦しいのは子供たち自身です。怠惰やわがままではないのに、その特性に原因があることを保護者や学校にも正しく理解されないまま叱責され注意され続け、不登校になってしまうという事例が大変増えていると感じます。不登校の根本的な原因を見つけて適切な支援がなされる必要があると感じております。

また、近年では発達障害への支援だけでは解決できない事例も同時に増えています。障害が複雑化、多様化しており、今までのような叱るだけ、伝えるだけの支援では解決しない。逆に注意して叱ったりすると暴れ出して余計に問題が大きくなることや、激しい暴力が理由もなく突如起きるといような子供たちが今学校にいらっしゃいます。理由はさまざまですが、その理由の一つに愛着障害があると言われております。昨年度末に市民病院の那須ドクターがこのテーマで講演をしてくださっております。愛着障害の定義はさまざまですが、特定の人に対しての情緒的きずなが育っていないために起こる障害と言われております。非常に難しいところですが、ADHDにおいても自閉症スペクトラムにおいても愛着障害においても、見た目の問題行動は一見すると同じように見えます。しかし、原因は違う。問題行動の理由はそれぞれ違っています。ADHDは行動、ASD自閉症スペクトラムは認知、LDは愛着障害や感情が理由だと言われております。

多動という行動をメインに少し考えてみたいと思います。

多動という動き、衝動的で激しいという行動が、いつ、どこで、どんな条件で起きるか考えてみます。それはいつもなのか、広い場所なのか、それとも決まって月曜日の朝なのか、こういうところを分析していくことで、その背景が分かることがあります。例えば、いつも多

動という行動になるのはADHD。広い場所で多動になるのは、本人にとって落ちつける場所がないときに、本人の中に喪失感が生まれる。喪失感を認知したときに起きる。月曜日の朝だとすれば、土日に家庭で何か問題があり、嫌だった感情がそのまま残ることで多動になります。

多動という行動だけではありません。その原因を正しく見定めないと、間違った支援をしてしまうことになりますから、正しいアセスメントが必要になります。今、現在愛着障害のお子さんは10%いるのではないかというデータもあります。そのほか感覚過敏で悩むお子さんも最近は増えてきました。セーターの毛を針のように感じる、食べ物のざらざら感が気になって食べることができない、エアコンのモーター音が気になって教室にいられない、さまざまな過敏性から生活のしんどさを抱えているお子さんが増えてきました。特に、自閉症スペクトラムの障害を持つお子さんの80%に感覚過敏があると言われております。近年では複数の障害が合併しているお子さんが非常に増えております。原因、背景を正しくつかむことが大変難しくなっていると感じております。

今、子供たちが抱える問題は、今述べましたように非常に複雑多様化しております。教育だけの、学校現場だけの力では解決できない問題もあり、他機関と連携していくことも必要だと思っています。行政もその一つだと思います。今も他の課の皆さんとは、本当にすばらしい方たちばかりで連携をとらせていただいて成果を上げているわけですが、さらにとということも幾つか考えてみましたので紹介させていただきます。

例えば、切れ目ない支援実現のために、今、臨床発達心理士の方々がWISC等の発達検査を行っていますが、就学前のお子さんは子育て応援課、就学後は教育センターというふうに場所が分かれているわけですが、それぞれ、教育センターと本庁と違う場所にいることから、日ごろからの情報共有が非常に難しいと思うときがあります。特に、年長さんから1年生の引き継ぎは大変重要ですので、そうした連携がさらにうまくいくといいなと思うところであります。

次に、島田市の保育・幼児教育のために、関係課のさらなる連携が実現できたらと思っています。今年度より新幼稚園指導要領・保育要領が全面実施となっております。園の違いはあっても、卒園時までには育てたい姿が、園の違いを問わず共通で示されました。どの園においても小学校1年生までに育てたい姿というのが共通されておりますので、保育園、こども園、幼稚園で分けることも大事ですが、分けずに島田市の子供たちのためにとといった視点で、各課が連携して幼児教育や保育の充実が同じ足並みで進んでいけたらと思います。

次に、放課後の子供たちへの支援について考えます。

就学が決まった後、大抵次に保護者さんたちが悩むのが放課後
どうしようという話題です。働いているけれど、放課後をどうし
ようといったときに、例えば学童さんは子育て応援課、放課後デ
ィサービスさんについては福祉課ということを守護者さんたちは
ご存じではありません。そうした情報提供ができる場が、自分
で見つけ出した人はいいのですけれども、得られない方たちにも
同様に情報提供が行うことができればと考えます。

最後です。

早期に子供の困り感に気づくためにということです。島田市は
早期からの就学支援が進んでまいりましたが、より一層というこ
とでの提案になります。3歳児健診の後、全ての園児において発
達を確認する機会というのはありません。でも3歳から就学前に
実はそこで発達の課題というのが明らかになる時期がありますが、
そこにおいて見落とししてしまうというケースがありますので、
やっている自治体もすごく少ないので難しいのですが、例えば5
歳児検診のようなものであるとか、あとはすぐにできるものとし
ては、厚生労働省における軽度発達障害のための気づきのための
ツールに指定されているSDQといった、お子さんの課題を洗い
出すようなアンケートがあるのですが、そうしたものを使ってお
子さんをスクリーニングしていく方法も考えられるかなと思いま
す。

早口で申しわけありません。非常に島田市の就学支援は今とも
成果を上げていますが、さらにまた皆さんと連携して、同じビ
ジョンを持って進んでいけたらと思います。どうぞよろしくお願
いします。

染谷市長

ありがとうございました。

特別支援教育を取り巻く現状、年々難しくなっている状況が伺
えたのではないかと感じております。年々難しくなるというより
も急激に数が増えているというこの状況については、本当にどう
してと思うぐらいですが、そうした状況があるということを皆さ
んに知っていただけたと思います。こうした課題についてすぐ
に解決できる問題ばかりではないと思っておりますが、皆さん説
明を聞いて、どんな感想をお持ちになったのか、まずそのあた
りからお話をさせていただきたいと思えます。

いかがでしょうか。

秋田委員

私も子育て支援のお手伝いをさせていただいている関係で、
発達障害の診断を受けた保護者の方からお話を聞くことがあ
るのですが、そうするとその先のことが分からない不安とい
うか、例えば特別支援学級に入ったら、その後はどうなっ
ていくんだろう。高校に普通に進学ができるのだろうかとか、
社会にはどうやって出ていくんだろうとか、その目の前のこ
とではなくて、保護者の方はその先のことをすごく不安に感
じているのかなと、ここ一、二年感じています。急

染谷市長
原委員

激に社会の中でも発達障害という言葉が知られるようになる中で、情報がたくさんあり過ぎて、保護者の方もどの情報を自分たちは信じていったらいいのか分からない、どの情報を得ていったらいいのか分からないところもあるのかなと思います。本当に今急激に増えてきていて、学校の現場もそうですし、幼稚園、こども園、保育園もそうですし、あと家庭もそうですし、いろんなところが落ちつかないというか、本当にそれぞれのいろんな思いを抱えているのが現状ではないのかなと感じています。

ありがとうございます。

感想ですけれども、私が教員をやっているときにも、確かに困惑感を持った子供たち、手のかかる子供たち、配慮を要する子供たちが本当に多くて、自分のクラスを上手にみんなが気持ちよく生活をしていく、毎日を送っていくというのが結構大変だったという思いがありますけれども、この数字を見ると、そのとき以上にもう本当に毎日が戦争のように学校の現場は慌ただしく過ぎているのではないかなと思います。先生方が通常の授業をきちんとこなすために、一人一人の子供に対する対応をいろいろ工夫しているんですけれども、やはり専門的な知識がもっともっとあれば、もっと適切な指導ができるのかもしれない。しかし、それもままならない、というか毎日の教科と授業だけに追われる部分も多いでしょうし、満足のいく対応ができなくて先生方の心の中では悔しい思いを持っていらっしゃるのではないかなと思いました。お母さん方も子育てで悩みを抱えているお母さん方が年々増えていて、精神的に安定できない毎日を送られている方も多いのではないかなと思います。感想です。

染谷市長
磯貝委員

ありがとうございます。

今、学校教育課から説明を受けて、なかなか現場は大変だなと思いました。率直に少し質問させてもらってもいいでしょうか。

染谷市長
磯貝委員

はい、どうぞ。

今、特別支援学級の先生の人数、それと専門性といったことについては、今のご説明の中では特段触れられていなかったように思うのですが、その辺りについて簡単に説明していただければありがたいと思います。

というのは、私、学校訪問去年やったときに、あれは中学校だったと思うのですが、知的障害のクラスに3人の生徒さんがいて、同じような足し算をされている。そのとき少し見ただけですけれども、その3人の生徒さんもそれぞれレベルが違うと思うのですが、同じような足し算をされているような、少し画一的な授業内容だったかなと思って。ふだんはそのようなことないでしょうけれども、その辺りについてどうなのかなという率直な疑問ですけれども、現状についてどのようにお考えなのか、教えていただければありがたいです。

増田学校教育課指導主事	ありがとうございます。 特別支援学級の担任の専門性ということでよろしいですかね。
磯貝委員	はい。
増田学校教育課指導主事	特別支援学級の先生ですが、特別支援学校に行った方になるということが非常に多いですが、ただ今も述べさせていただいたとおり、クラス数が急に増えているということもありまして、全てのそうした経験のある方になるばかりではありません。今まで通常級をやっていた方になるということがありますが、その場合は研修が、1年目の先生には県も市のほうも研修をしております。または職場での研修ということで、必ずベテランの教員と組ませて研修という体制をとってありますが、なかなか行き届かない点もあるかもしれません。
磯貝委員	ありがとうございます。 あと、今の資料の中で、幼稚園が制度的に整備がおこなわれているような、そのような感じが私は少ししたのですけれども、誤解かも分らないですが、幼稚園でのこういった子供たちへの指導計画が小学校にスムーズに報告される形を今以上に、今、子育て支援課と学校教育課が分かれているという、臨床心理士の方もそれをドッキングしていかなければいけないとお話と通じるところですけれども、その辺りのことを、もう少しスムーズにいただければありがたいという感想を持ちました。
染谷市長	特別支援を要する子供たちのいる幼稚園での対応ということですが、幼稚園は私立の幼稚園がほとんどということで、幼稚園には特別支援学級というのはありませんもので、一般の子供たちと一緒に学んでいるということですね。
牧野委員	感想です。 前回も話を伺って、本当に安易な判断は我々ではできないなと痛感しました。本当によく詳しい方に相談をすることが大事だということが、またさらに分かりました。 それから、少し質問ですが、34ページの愛着障害は10%いるのではないかというお話がありましたが、何の10%ですか。
増田学校教育課指導主事	在籍する児童の総数です。
牧野委員	子供たち総数の10%ですか。
染谷市長	すごい数です。
牧野委員	すごい数だなと思いました。
増田学校教育課指導主事	すみません、補足説明で。 愛着障害単独であるということは余りなくて、自閉症スペクトラムと愛着障害、ADHDと愛着障害というように併発するなど根本的な課題も多いので。
牧野委員	ありがとうございました。

染谷市長

県とか国の臨床発達心理士の配置状況とか見ますと、島田市は手厚いと思ったのですが、課で今言われた就学前と就学後で連携をとらなければいけない、おっしゃるとおりだと思います。数字だけでは少し分からないお話をいただきまして、より理解が進んだなと思います。

それとあと、そのほかにも課の連携ですね。いただいた資料の中の幼児教育が学校教育課のみでというお話がありまして、本当にそれは早く手を打てばいいのかなと思いました。

ありがとうございます。

ありがとうございます。

今、いろいろと教育委員の皆様からご感想、ご意見等を伺いました。今、学校教育の現場と、そしてまた子育て応援課、保育支援課、こういったところの連携を強めて、幼保から小学校へというところについては、切れ目のない支援ができるようにしていくということで頑張っているところでございます。

そして、もう一つ、きょうは出なかったことではありますが、私自身が発達障害のことで一つ課題だと思っているのは、制度的なことではあるのですが、私が昔教育委員だったころに、県はこの発達障害を擁する子供の学級、ですから特別支援学級については拠点校制度を導入するというので、全ての小学校・中学校に置いていた発達支援の特別支援学級について、各中学校区ごとに拠点を設けて置いていたのですね。ですから、今島田はそうなっていると思うんです。全ての学校ではなくて拠点校、知的、情緒、肢体、それに弱視ですか、全部そろっているところもありますし、別々なところもありますが、拠点校化している。

ところが、県がここ何年か、この拠点校化ということを書いていなくて、まさに一生懸命その推進に努力をしてきた島田市が、今度は各学校へ置きましょうという流れになってきたときに、今まで推進してきたことと今県が進めようとしていることにギャップが生じてきているのではないかなと私は強く、特別支援に関する県の見解を伺いたい、と思っていることが一つ。もう一つは、皆様もうご視察のときに見ていただいたと思うのですが、特に情緒の学級等、特別支援学級は定員数が8です。8人までは1つのクラス。でも情緒の学級などは5人だって大変で、先生2人、3人いても大変なぐらい。ですから、その障害によっては、8人という定員はもっと低くなければ、教室の経営ができないのではないかなということも感じておりまして、こういったことも県の教育委員会に市としての意見を伝えていきたいと思っています。

教育長、これまでの意見出た中で、いかがでしょうか。お考えがありましたらお聞かせください。

濱田教育長

まず最初に、拠点校化の話、今、市長からお話がありました。県教

委は拠点校化の考え方を完全に捨てたのではないと思います。若干柔軟になってきたとは言えると思います。正式な見解を県に求めますと、拠点校化の方針を継続しているというようなお話をしますから、それは残っていると思いますが、柔軟になってきたとは言えると思います。ただ、柔軟になってもひとり開設、学級に1人だけ子供が在籍するようなことについては、大変ハードルが高いことがあります。過去には、ひとり開設をしていた学級の子供が長期入院をしたために、籍を特別支援学校に移したことがあります。そうなったときに退院してきても学級を再設することができません。そういう課題があるものですから、ひとり開設をするということ、それからどの学校にも簡単に学級が開設できるという状況ではまだないと思っています。

それから、幼児における就学支援が話題になっていると思います。幼稚園、保育園のご理解がありまして、最近、小学校1年生の学級入級という流れができていますと思いますが、他市に比べるとまだまだ少ないというのが現状だと思います。さらに、この点については充実していかなければならないと思います。以前教育委員が園訪問をしたときに、園の人たちからお話があったことは、この就学支援を少し強く進めると、園離れが起こってしまうと言われました。特に幼稚園においては、発達障害またはいろんな障害があることを保護者に理解させようと強く関わると、それでは園をやめますみたいな動きになってしまうことが大きなネックになっているという話がありました。その中で、一つの解決策として、いずみのような通級のところに通わせることによって、通う中で子供の発達障害についての理解が進んで、就学支援がスムーズにいくというお話もありました。そういう意味では、園も私立という経営の部分があることも考えながら就学支援をしていることから、通級教室の充実ということは、園を助けることになるのではないかなと思っています。

それとあと、今、幼児の就学支援の難しさということを話しましたが、もう一方で、生活に追われている親という存在もなかなか見過ごせないのではないかと思います。就学支援を受けている、準要保護を受けている家庭も大変増えています。そういう家庭の中に、若干愛着障害という傾向の方も見られるものですから、親の生活の苦しさみたいな部分が子供に影響しているという部分も見逃せないと思います。

染谷市長

ありがとうございます。

ほかにもこれまでに出たご意見の中で、ちょっと聞いてみたい、あるいは自分はこのように思いましたというようなご意見がありましたらいかがでしょうか。

原委員

以前、私が現場にいたときですけれども、保育園と小学校がまだ公立の関係だったと思うんですけれども、臨床心理士の方が保育園も小

学校も同じ方が見てくださりして、何年か継続して見てくださっていたので、保育園のときにいた子供たちを小学校に上がってきたときに継続して見ていてくださる中で、随分こういうところがよくなったねとかこういうことができるようになったねというふうに、子供の成長を認めて小学校の職員に伝えてくださる。そして、さらにこうするといいねというアドバイスをしてくださった経験があるのですけれども、長期にわたって専門の方が見てくださって、その変わる場所でもアドバイスをいただけることができるというのは、子供にとっても、それから預かる教員にとっても大変ありがたかったなとすごく思いました。やはり人がどんどん変わっていってしまうと、案外子供の成長が見られなかったり、指導したことがどう継続されているかという確認ができないと思うのですけれども、臨床心理士の方がずっと継続して見てくださるというのはありがたいことだなと思いました。今、保育園が私立になってしまった関係で、保育園と小学校を同一の方が継続して見るということは不可能なことなのではないでしょうか。

染谷市長

不可能ということではないと思うのですが、臨床心理士について、こども未来部の部長、ちょっとよろしいですか。

孕石こども未来部長（傍聴者）

臨床心理士ですが、現在、臨床心理士の方、正規で1人、嘱託で1人います。来年度から、特定任期つき職員ということでさらに充実していくと思うのですが、現在公立の保育園だけではなく私立の保育園、恐らく就学前のお子さんたち全員を見ていただいておりますので、そちらのほうは大丈夫だと思います。

ただ、小学校に入りますと教育センターのほうに臨床心理士さんがいらっしゃいますので、そちらへ引き継いでいくことになるのではないかと思います。そこからは私もそこまで詳しく知っていないものですから、先生のほうから分かればお願いします。

増田学校教育課指導主事

検査を行う臨床発達心理士は教育センターにいらっしゃるんですが、ただ、小・中学校で本当は学校教育課で今お一人、山崎先生という別の臨床発達心理士の方に学校の巡回をいただいております。それは小学校も中学校も全校を回っていただいております。年間大体1つの学校に3回行っていただいておりますので、そもそも原委員がおっしゃっているような成長を継続して見ていただいているということは、小中の間ではできているかなと思います。

濱田教育長
増田学校教育課指導主事

幼・小は。

幼・小は、そこで変わってしまうのですが、ただ、子育て応援課のほうも非常に丁寧にやってくさってしましまして、入学した後の検査をしたお子さんについては、4月、5月の間に学校を訪問して下さって、その子が就学してからどうかと様子を見てくださったり、そこで具体的な支援方法を教えてくださったり、という取り組みをしてくさっています。

染谷市長

ありがとうございます。

臨床心理士については、先ほど子ども未来部長から話あったように、今正規1人、嘱託1人ですが、来年度は増員ということで、こちらは計画をしているところであります。

濱田教育長

先ほど少しお話ししましたが、幼稚園を教育委員が訪問したときに、幼稚園から要請されたことがもう一点あります。それは、幼稚園、保育園の情報を小学校に伝えるとき、大体、3月に情報交換会をやっています。でも、引き継ぐ方が必ずしも1年の担任になるとは限らない。ですから、情報が又聞きになるようなことが起こっていて、せっかく幼稚園、保育園でまとめた情報、または伝えた情報が、指導に生かされない場合があるのではないかという心配がありました。

その解決策として、4月または5月のある程度子供たちの指導を1年の先生がした、それで状況を把握した状態の中で、もう一度意見交換会、情報交換会ができれば、子供の実態に合わせてアドバイスまたは情報共有することができるのではないかという要請もあったものですから、これは教育委員会としても、または学校としても少し検討していかなければならないことだと思います。そういう中で、より連携した関係が作れたらいいなとは思っています。

染谷市長

ありがとうございます。

今、幼稚園で伺ったというその意見は、私と保育園の園長との面接会のときにも出てくるお話で、3月に引き継ぎしても、1年生の担任が誰になるか決まっていないう中で、やはり担任になる先生方にきちっと伝えていきたいし、4月、5月と子供がどういう状況だったのかということを見てから夏ごろやっていただくと、もっとつながっていくのではないかというお話をいただきましたので、こちらのほうはまた検討して、一番適切な時期に、その要望等小学校への情報の伝達といえますか、共有を図っていければと考えております。

ほかにはいかがでしょうか。よろしいですか。

〔「いいです」と言う者あり〕

特別支援教育につきましては、さまざま非常に難しい課題、問題等もございますが、とても重要なことでもありますので、引き続き今後の課題にしてまいりたいと考えております。

多くのご意見をいただきました。

いかがでしょうか、それ以外のことでも、今後の課題について話題についてでも結構ですが、もしご意見があれば、ぜひ。

磯貝委員

この機会ですっかりですので、学校教育課に少しお聞きしたいのですけれども、特別支援学校で専門性を取得した先生が、普通学級の先生が行くというようなお話だったのですけれども、具体的にはどのようなことをされているのでしょうか。文部省のこういうプロジェクトを見ていると、コーディネート機能が特別支援学校にあるということ

増田学校教育課指導主事
磯貝委員

が明記されているのですけれども、その辺りのことを少し教えてほしいんですけれども。

研修の内容ですか。

増田学校教育課指導主事

はい。例えば研修とか、1年間行ってくるのか、例えばそのようなことを今、何人の先生がやっているということがあれば教えていただきたいです。

そうですね、人事にも関わることなので難しいですが、毎年、でも何人かのお若い先生が特別支援学校に行かれています。それで戻ってきて特別支援学級の担任をされて、そこで学んできたことをほかの教員に広めていただいているという状況であります。

濱田教育長

大体3年間で1つのスパンとして交流を行っています。ですから、島田市の教員だけではありませんが、一般教諭が特別支援学校だと大体藤枝の特別支援学校が多いですが、あとは吉田とか袋井にもあります。そういうところで3年間学んできて、その学びを公立の学校で生かすという制度があります。必ず毎年数人ずつ交流をさせているものですから、それを生かしてという話です。

ただ、その方だけで特別支援学級がまかなえない状況があるものですから、各学校の校長または教育委員会の学校教育課長は、一般教員の中から特別支援学級の担任をいかに生み出していくかというのは課題になっています。最終的には人物本位の選考になると思うのですが、課題の一つではあると思っています。

それから、先ほどの資料の中で、通級それから特別支援学級の増設ということがこれからもずっと行っていくと思います。そういう中では、さらにこの交流または育成ということは課題でありますし、もう一つが施設の問題もどこに設置するか、設置がなかなか難しい学校も今生まれてきているものですから、施設の問題も解決していかなければ問題としてあるのではないかなと思っています。

磯貝委員
染谷市長

ありがとうございました。

ありがとうございます。

そしてまた、これだけ数が増えているということは、世間一般に特別支援を要する子供たちということの理解が深まり、かつまた親も、うちの子は普通学級ですってやはり言い続けている間は、特別支援学級にはふさわしい教育と思ってもなかなか入っていただけの中で、そういった意味でも親御さんの理解も進んでいくという結果が、この急激な数字の伸びであると思っていますので、そういう意味では大変お子さんたちにとってはふさわしい教育を受けられる場を作ることができつつあるのかなとは思っています。

ただ、余りに急激な伸びですので、指導する先生方の問題、それから施設の問題、それからどこの学校にどういった特別支援学級を置く

染谷市長

かという課題、こういったさまざまな新たな課題が浮き上がってきているというのも事実でございますので、また場を改めまして、この特別支援につきましては何度もこの場でお話しする機会を持たせていただければありがたいと思っておりますのでございます。

ほかに何かございますでしょうか。よろしいですか。

〔発言する者なし〕

それでは、きょうは短い時間ではありましたけれども、率直な意見交換ができましたこと、心から感謝を申し上げます。

皆様からいただきましたご意見をもとに、今後事業に取り組んでいくこととなります。まだまだ課題等もあるかとは思いますが、この総合教育会議でも今後引き続き取り上げていくということでご承知をいただければと思います。

それでは以上をもちまして、第3回の総合教育会議を閉会といたします。

本日はお忙しいところ大変ありがとうございました。

閉 会 午後3時04分